

『兄の彼氏の兄』

著：神香うらら

ill：明神 翼

「ありがとうございました」

————数時間後。

その日最後の客を見送ってドアに鍵をかけ、夏葉はふうっと大きく息を吐いた。

「よっしゃ、今日も無事に終わった！ 明日は定休日！」

独(ひと)りごちながらキッチンに戻り、食器洗いに取りかかる。

夕方になって急に客が増え、この一時間はてんでこ舞いだった。ドリンクメニューだけとはいえ、やはりひとりで店番をするのは楽ではない。

(兄貴も、俺が授業とかテストでいなかったときはひとりで大変だったんだろうな……。そろそろバイト雇ったほうがいいかも)

店が軌道に乗るまで、アルバイトは雇わずに冬雪と夏葉のふたりに乗り切るつもりだった。

けれど予想していたよりも早いペースで客足が伸びている。大学の新学期が始まってからも土日と平日の夕方は手伝うつもりだが、ランチタイムにも人手があったほうがよさそうだ。

(あ、やべ。外の黒板出しっぱなしだ)

黒板をしまい忘れていたことに気づき、慌てて濡れた手を拭いてキッチンを出る。

ドアの鍵を開けたところで、誰かが階段を上ってくる足音が聞こえてきた。

(兄貴かな？)

心配して様子を見に来たのかもしれない。

しかしガラスの嵌(はま)ったドアの向こう側に現れた人影は、冬雪のものではなかった。

「すみません……今日はもう閉店なんです」

ゆっくりとドアを開けながら、夏葉はドアの前に立ちはだかる長身の人物を見上げた。

————威圧的な双(そう)眸(ぼう)が、じろりと夏葉を見下ろす。

男の陰(かげ)しい表情に、夏葉は体を強(た)ばらせた。

歳(とし)は三十代半(はん)ばくらいだろうか。仕立てのいいスーツとダスターコートに身を包み、厳(い)かめしくエリート然(ぜん)とした佇(た)たずまいは、この店の客層(きやくそう)とはずいぶんかけ離(はな)れている。

「ここのオーナーに話がある」

低(ひ)く冷(ひや)たい声(こゑ)で————しかし同時にひどく印象(いんげん)的な声(こゑ)で、男(おとこ)は来意(らいい)を告(つ)げた。

「……………どういったご用件(ごようけん)でしょう」

男(おとこ)の迫力(せきりき)に気(き)け(け)圧(お)されそうになりながらも、夏葉(なつは)は平(へい)静(じやう)を装(ま)って口(くち)を開(ひら)いた。

店(みせ)のことで何(なに)かクレーム(クレーム)をつけられるのだろうか。開店(かいてん)以来(いらい)特(とく)にトラブル(トラブル)もなく順調(じゆんてう)だったが、世(よ)の中(なか)にはとんだ言(い)いがかり(がかり)をつけてくる人(ひと)もいるということ(こと)を忘(わ)れてはな(は)ら(ら)ない。

「私は大(おお)河(こう)内(うち)仁(ひと)史(し)の兄(あに)だ。そう言(い)えば、用件(ようけん)の察(さ)しがつくだろ

う」

「……っ！」

驚いて、夏葉は男の顔を見つめた。

大河内仁史は冬雪の高校時代の後輩で、“大河内仁(じん)”という芸名で活躍している人気俳優だ。

そして……兄の同性の恋人でもある。

(この人が、仁史さんのお兄さん……)

言われてみれば、仁史と顔立ちが似ている。仁史の顔から甘さと華やかさを取り除き、苦虫を噛み潰(つぶ)させたらこんな顔になりそうだ。

「……中へどうぞ」

数歩あとずさり、夏葉は仁史の兄だという男を招き入れた。

後ろ手にドアを閉め、男が無遠慮に店内を眺めまわす。

「あの……どうぞお掛けください」

手近なテーブル席を手で指し示す。

「結構」

険しい表情のまま突っぱねられ、夏葉は首を竦(すく)めた。

(まずいな……ついにばれちゃったのか)

冬雪と仁史がつき合っていることを知っているのは、夏葉と仁史のマネージャーだけのはずだ。仁史の口ぶりから、兄とはあまり折り合いがよくない印象を受けている。

「———弟に同性の恋人がいると知って、私はひどく驚いたし動揺もした」

壁に飾ってある絵を眺めながら、男が切り出す。

「言うておくが、私は同性愛に偏見を持っているわけではない。しかし兄としては、正直なところいささか複雑な気分だった」

「……………」

固(かた)唾(ず)を呑(の)んで、夏葉は彼の言葉の続きを待った。

男が、ゆっくりと視線を壁の絵から夏葉の顔に移す。

冷たい眼差しで検分するように見下ろされ、夏葉は無意識にあとずさった。

「仁史ももういい大人だ。私も弟の恋愛に口を挟むような無粋な真似はしたくない。きみの人となりを見て、仁史にふさわしいと思える人物ならば反対はするまいと思っていた」

彼の言葉に、どうやら自分が冬雪だと誤解されているらしいことに気づく。

「いえ、あの……」

訂正しようと口を開きかけるが、その前に彼が手を上げて遮(さえぎ)った。

「しかし弟に店まで出させたとなれば、黙ってはいられない」

「……………ええ!？」

驚いて、夏葉は目を見開いた。

「とぼけるな。調べはついている」

「ごっ、誤解です！」

冬雪の恋人の兄に妙な誤解をされていると知って、夏葉は慌てた。

この店の資金は、すべて兄が調達したものだ。足りない分は仁史が援助すると申し出たらしいが、兄は恋人と金の貸し借りはしたくないと断り、銀行から融資を受けた。

「恋人に店をねだるような男を、私は認めない」

「違う！ちゃんと話を聞いてください！それに俺は……」

冬雪ではなく冬雪の弟です、と言おうとして、夏葉ははたと口をつぐんだ。

自分が冬雪でないとわかれば、この男はきっと冬雪に合わせろと言うだろう。心身ともに疲れ切っている今の冬雪に、これ以上ストレスを与えたくない。

(家にまで押しかけられたら迷惑だし、連絡しようにも仁史さんはアメリカだし……)

意を決して、夏葉はすうっと息を吸い込んだ。

ここは彼の誤解を利用して、勘違いさせたままやり過ごしたほうがいい。あとのことは、仁史がアメリカから戻ってきてから三人で相談しよう。

「……確かにあなたの弟さんとつき合ってますけど、店の資金はいっさい出してもらってません」

慎重に言葉を選びながら、夏葉は答えた。

「信じられないな」

「なぜですか」

「去年の秋、仁史が銀行口座から一千万引き出していたことがわかった」

「……一千万!？」

「使い道について、仁史は頑(がん)として口を割らない。それこそ不自然なほどにな。そこで調べたところ、きみの存在が明らかになった」

「……いっせんまん……」

呆然として、夏葉は呟(つぶや)くようにくり返した。

そんな大金、仁史はいったい何に使ったのだろう。

もしかして自分が知らないだけで、冬雪は仁史に金を借りていたのだろうか……。

「さて、ここで本題だ」

男が腕を組み、鋭い双眸で夏葉を苦々しげに見下ろす。

「仁史が納得して金を出したのなら、それはそれで仕方ない。私も店を閉めて金を返せとまでは言わない。ただし、これを手切れ金だと思って、弟から身を引いて欲しい」

男の言葉に、夏葉はがつんと頭を殴られたような衝撃を受けた。

「なっ、そ、そんなことできない……！」

「できない？ それは仁史を愛しているからか？」

男の問いに、夏葉は大きく頷いた。なんとかこの男の誤解をとき、ふたりの仲を認めてもらいたい一心だった。

ふたりがどれだけ深く愛し合っているか、夏葉はよく知っている。

冬雪には仁史が必要だし、仁史にも冬雪が必要だ。

「仁史の職業がどういうものか、きみもよくわかってるだろう。嫌でも私生活を詮(せん)索(さく)され、スキャンダルが命取りになる、きみたちの関係がばれたら仁史がどれだけダメージを受けるか、考えたことはないのか」

「———」

唇を噛んで、夏葉は無言で男を睨(にら)みつけた。

(そんなこと、言われなくてもわかってる！ そのことで兄貴がどれだけ苦しんできたと思ってるんだ！)

そう叫びたい気持ちを、必死で抑えつける。

———冬雪と仁史の出会いは、十年前の高校時代に遡(さかの)ぼる。

仁史の芸能界入りが決まったとき、冬雪は彼のためを思って身を引いた。三年後に

再会するまで、仁史はそれを冬雪の心変わりだと誤解していた。

再び結ばれてからも、冬雪は仁史のためならいつでも身を引く覚悟をし、彼との関係に深入りしないよう自制していた。悲壮な決意は、端から見ても痛々しいほどで……。

仁史が時間をかけて自分には冬雪が必要なのだとわからせ、信頼できるマネージャーにふたりの関係を打ち明けて、ようやく冬雪もネガティブな感情を払拭したところなのに、こんなセリフを聞かせるわけにはいかない。

仁史の兄にこんなことを言われたら、生真面目な冬雪はきっと従ってしまうに違いない。

「よく考えて、なるべく早めに返事をもらいたい。これが私の連絡先だ」

男がスーツの内ポケットから名刺入れを取り出し、カウンターの上に一枚置く。

「……っ」

すれ違いざまに柑(かん)橘(きつ)系(けい)のコロンがほのかに漂ってきて、夏葉はびくりと体を竦ませた。

険しい表情には似つかわしくない、男っぽくて官能的な香りだ——。

男が階段を下りてゆく足音を聞きながら、夏葉はよろけるようにカウンターに手をついた。

本文 p18～26 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>